# 増鏡

六

和書
一〇四一二號

和書門
類 一〇四一二號
函 一一五
架 一一
冊 一〇

内閣文庫
和書
類 一〇四一二號
冊 一〇
函 一一
架 四

内閣文庫
番號 和 10412
冊數 10 ( 6 )
函號 138 38

三ノ一

第十一　第四くらゐ

文政十一年正月廿六日春宮より位授づけ申さる

文政十年　文日蔵まゐ門内侍所劔璽引くして押小路殿へ

行幸あらせ給ふ　文の日おとゝしの二條内裏へまさきく

くり九条の御殿へまいり給ひ　若人参りて

禁式おかしきをもまうけ給へるいとちいさ

くうつくしゆゑ　おもてびんばゆゑ位引なし

うち御ぞくまばゆ　宮ゝおつきはゝ宮しれお

とがくしうめてゐくれたすかと　花山院内大臣

抱持ーゝさ彩く　故宮　文乃御せうと　公雅卿　若

かどはあたれり　九条殿ひつぐ　おとゝ宮などの

れをせまゝかんとおぼしつゝ殿上より人々おりて
まゐりあつまりたまひしく法皇まのあたりそのゝちより上達
部乃殿ありゝ女房八領領よりすゑまゐ内大臣公親
乃女とはゞめて三十餘人おみ君毎まゐつきて殿
をとりくゝまきてけあり廿八日よりぞ内裏乃ほ
ゐくゞめられゝ給ひくて新院二月七日法華はじめ
させ給ひ大文院乃おりしまゐ中門京極実後式部
將乃家へなすゝ御車乃後かゝ廊乃御車上達部後上人
ゆるゝくうへ乃きゝめて法ゝまつゝ新ゐ十月
廿ゞて菊花あゞ法皇はたくまつりはじめ
ゐびをさゝ給ふぼゝゝ法ゝ御ゝ

同廿日布衣乃御車はゝゝ内裏へいらせ給ふ新
乃御車前末代法かりぞゐ山法乃二法ぞゐ代ひゝ
をゝゝのをり絶乃法ゝゝめをきたくまつる未院を故
院の御願三年の事ゐゞ入くゞ月乃すゑつゝ
より六条乃長講堂ゝてあれはらくゝと
ゐゝ法ゆびの四とゞゝて法をづゝ法華經
なゝかゝせたまふ前僧をゝ十餘人ゐゞめゝとをくく
懺法をゝくまゐ殿ゝゝ四ゝゝゝゝゝ
ゝゝ法ゝゝゞゞゞゞゞゞ
ゐゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

新院もいろめいうの法師ども嵯峨すておきられる。
三月廿六日に法勝寺の住持にてゆくゆくは
廿七日に官廳へ行幸あり。女御代
花山よりいぶかの糸毛の車。寝殿乃階の前に大
后殿大納言長雅よりせうまれ紅の十重の衣
初めて車にのりもいぐるまぞ。十一月十九日又官廳
へ行幸世日くらり五節
むくりはてるまでとまりぬ。廿二日大嘗會廻立殿
乃行幸云々。清涼殿の中神
もの。新院に世とをろしまする事かくこそ
法皇ますに日ごろ物ものうしろ所

くぶつの法華会はじまりてとぐさせたる
いとおもしろ。法勝寺の八角院のあとにいとあやしこの
つとけ法師乃とくせをぐの思ひつる事をすまま
ぢうもすがられくせをもむとんのまうけ
まして菊号とをりあつたてまつらせたる兵杖を
もらぶめんとて法勝寺どもめして御ぐしけいとあり
つとに祖いとめがそとと思ひあくるまでとあり怪
うち思ひめぐらしもいとたのもしがさき事おりくく。
物かの人へく神どもうかひわたり新院もいとあり
なり法華きしきまてんつりうしにおとこ三千三百
ぞ行くくまゐ故院乃四十九めてはぐ行ろ

ゑ[illegible]とぶぶらそは雖もくれてこゆくしの。
東乃ゆくさをきくれゆえんとと居づひ給ふ。
さかくゝぬ女房上達部乃中ゆをこりまれむすす
うゆくまつまれ人こゆへなどそわゆくとをはまつゐを
き用ゑをめきば。祝くよ分てまさくもぬん
ゆそくゝわるひゐ考くゝ家くゝあゐ分てつゝあ武士
くをあづまわをれどゐさゆゐして例の陣乃ゆくぐ
めるどやうよゐれうきゆまる武士ごをもゐあひく
泮宮くりごれてゐいあまゝ関東乃ゐ時宗
といそ相模守世中はすゐらゐあゝありまゐ放縁
頼綱ゆゐ康元元年にゝ[illegible]てのちぎ乃びて

諸国ゝ上洛ゆゝしありきゐゐりゐをゐ国ゝくゆゐりあ
人ゐ狂などをゐゝくあゐかくりみきゐん乃はうを
ゝにくあゐをきゆゐおゐ[illegible]れやどりふたゐゝゐくく
ゐそゐの家めゝゐありきゐゐとゐひきくゐゐりあゐ
うきゝゐなどのうづゐれゐゐときくゐゐゐくゐ我ゐゐ
やゝきゐるきどむゝくゐゐゐきゐうをゐゐて
まつゐゝいまゐ世をやゐゐんむゐゐ滑稽あてまい
ゐんゐてゐうでゝゐをくゐゐへなどのへどおでゐゐと
なゐゐ法ゐ若のゐふゐどゐゐゐゐゐとはゐゐゐひゐゐゐ。い
ひあゐ世をくゐゐゐゐとゐちておづまゝへゐてゐゐく
とをゝゐまゝにゐゐてんきば入道教の出家息

なりきるもあるうゑくとてかなぐくうまきへうたやう
ーはすくしひの。佛神乃あらはれ給へるとてこれ
めうとつさてよるこびそりぬやうやもとべく教
きくしあやしてくふくをつづひとのこーそう。
最明寺乃入道とぐいむきぬぐたりや
いとの乃所ぐ拾ものもいとめぐたきものよて本院乃
ふく世と拾ぐりとそんずるぐ拾ぐけるくお
くれあるゆるゆる也ぐ院乃御おそいやうそうなう
めるまぐそくれたものうくくさせるるあやは
ひとをれくしものくぐんぐいくでらたちまれよりあり
まくはくのーはすべきいくーきるざより

とて新院へを奏ーぬれさるるあるあるあるあるて東
のゆくさろのくくをを拾ぬをたくゆくゆくゆ十月廿日
節會をとあくれくいとめでぬぬれぐくくこと
はんるぐくさめくぐぬくさみくくうむせたまるべき
御道心ゆをあくーばだぐーとぐはるぬぬぐまである
ぐれくのとあのあう世人も思ふいべーー御門より
くのよ二くくれたるのくんあるりぬようきの君は等
まくれ本院あるりぬとくきむくいはてをきぬたく
くくくこ条院小一條院言倉院あどやれくくはーー
くんぬる金院の御とは御ぐゆまるをあくはくさせあハ
ーまぬぬぐーまれあるりぬくくく

天皇と天武天皇とは母方の御腹の御ちがひ
なりけれども此御すゑ方をうけつぎ世をたもち
めしたまひなどもをもてやしなはせ給ひ
まして位をもたもちまゐらせんと思ひやりなり新院は
位をはなれ給ひしもあくやまりけれども大きさき人目をも
御中はいとゝ思ひ給ひ滑稽をもはぶかれひとへ
まゐりなどをもかきまゐるこまのりつゝうまのまへ。
大炊院もめやすくおはしまさるべし。まことや文永比
はじめつかたぶり給ひし新宮を後深院の更
衣だゝ比文ぶゝ院うくれさせ給ひてのちは
まそおはりなれどもなほ後深院と海松ざかもまゐらせ
給ひ。

とぞ。かの院の御事いめ井まして善勝寺大納言隆顯ひ
まりごろうの御文くよいとなりまして調じてまの
ら奏さまりぞこめくりばかりをものくおはまるそ
のくちあまりあのあのうの給まこのかれどむ
しさまふおぼしまずけかれどもへ御ときせ給ひてんやとは
まをしたとり給へで。女院の御ちうけを奏宮まいる。
さいもち院をうしめます。内侍帳だうの民部ぶそく
長押の下へ西園寺大納言云実兼善勝寺大納言隆顯公
さぶ簀子よりぶまけ為方兼行るぶさぬくふぬま
ぶくびなすぶれぶりてぶへくうれぶちあり。御院の
御事のくちをやうれ。

ゐふさすひいめづらしくあんぷとけくあそびせる
まへなどうちんぶれやすく給へば女房めしてはなし
どもうれあしせしはいの院の御まへよ法琵琶西園寺も
をとさ給へ薫物日ちまれ神おうしひあどしておとと
くしかぬしもかりうしぬ乃ぬまへよ院方はうしは施るをとりでゆすく給ふ。
えいとくるうしうおぐされくとこゆをえうごき
給ふ。女院あのはうしはけれいとんりあくんく
給るめはよ。ゆゆだいうるぬはうあやあべ
かりむとのうまへだばいうしひ乃箱をあられをを
のの袋ちうすうれどくいうの様とうを給へ。法
。ことせまして伊勢よはのうしはゆ上ゆの秋乃さ
のうさ御のうりふく仁和寺よ袋笠といふあすと
はまの門花の院乃はゆよはいとたうしく男八ぬく
給へ上しむしれ御ん行きそをあられよおゆい
どく。大宮院いとゆんうしよとあうひたてまうりの。
龍山殿よ行うしはゆ十月ちうり歌えもする
しはてまつわ給りんとてぬ院にもいうせ給へき
うしはせううとおまてばめづくうくて法華あり地
の泉ハ女院乃はまへよて世うしの子乃はゆ地ゆうり形
どけどやうゆやうし給へ文乃日夕はけて袋笠敷亀
御むひよたのびうさはよそ殿上人一二人はは車

ゆくうちたてまつる世ばかり寝殿乃みなみ北の
方ばかりとのごもを引はくろひろく北面ありとぞ
かりして院の御くるまへ御消息ゆるし給へきぼ所ぞ
ひろく給へ女房御くるまをせさせ給へとの中より入
給へ女院をかうれうすゆるひの御ところをかうしあけ
と申させたまへきこは。舞宮紅梅乃御ひよろひうめ宮
御こうちきたちぞいとめぐくはちりて
世よこやおまり給へんと乃西ぞたいらかなる
乃乃れくしざくしをとりめぐぞひり
御ぞあておうつくしうぞおろしをとる御ぞ
ものめづらかなみしさ殿たちの院をうれもかしこぶ

きかたりをうれ野のはかをすゑ乃はを豊死
多の御ぞしめきなつぐ記ばかりなるとのくを記
しめくえうくぶうりみちてくるる給へりとらう
ぶ川女房むくさ記乃まひ五おもだくり引きて
多れ御車よ御のりたまへり。神代乃御物がたりあど
よ記ばかりて院のいまは乃ろ乃れ事るどあい
きかなつくるを世ばかくへもつ御ぞ
あるかくのくちうふばかりぞ記さ御あるみき
御ぐりのこかいむるぐくてあるひそてあ院も我
御くるかりくうちやすゆ世給へきどまどろまれ
給へなどおりつる御れかりてれば

ぢぞいかをうりあきぞぢ
ようりかるまのぢいうぶ
らかくとしぐれ月よりはじめておひたちはべまば
うとくくしるとうしひたまへ弓まことつゆ
はしまうすくやありうんぞをひさぬるあいぶせく
てなくあんいあぐずくもれりとれぶをまかぬ
はやは上ゐまやあるあるはは大納言の女はもの分ちうく先
しはうえ人ぞうは殿ゐあはさぶべきゆうりあてむう
ましうくまのりなうくをめしよせうなきくし
きまのでいあまひすうはさぐすくうけちうきはめぐ
りうぞりふれはくうりとうれはよれうもいを

かうりうべしとせちわまめぶちてのうまへたいうぶ
たちうりうん羨うつぐいもなくちうきゆうしさ殿
はへまばいかんうしとおぢせどあへうふきえまばひ
などはしはうはぶ殿うあくあよくくしてあた
まれあはけうひあわ殿をまどくれどうすあ
いあうたくしうさすぐふへ乃はうあいくうをを
まけ家あうくあぶれいぐはひぬはまくはうど
はおやとものどもおうはてはみてまつうはたまふ
ううべうあぶ大うさなりやうよりたうはぬはさ
ぢもいうあなもやうよりはくうはうはうはくか
うりちのうく

[illegible]
[illegible]
いと所まを記申まつり記乃ぞえんかるれきおこそ
あめかなやまつとてゆらんをもいまこそ申て
ゆくえんもうてあまこだがぞかよりてうて
さ紙はさうは給へなとゆくさちすべーゆらく
時分くく御暇申ど酒のわてはあつるこそ時分面と
を申あり変きいかとせづ
いつでんしたてまつるむどんとおがーやとくへど
女院なとの時きーれのいとるつーきおゆしこえへ
給おつきあるをるけまこは学ぶ杉田さるまてあの

[illegible]
月をさり給ふて天子は父母おつとまどす
番北家と申給ふをいの御ーれ方れ文ばひありき。
一おとむくひ給ふべーやとのまへでさうあるは事
ありやと人くめとくせつちのぞくはきしろ。
時まへ乃迦なる雀罪ーそひまーれてあそばな
まとうひ給ふのちはんきこめます。○せまその里
といぞすへくくるどして給ふぐつる程
よありぬくていうあけぬまこば女院も我は方よ
いせ給ひぬのまつのおまーあぐかりうめ形分
あるまーてよまー給へだへくをすーまわぞ

そこなひかりけるあそこのかりあるく孫いりぬ。あ
まは、あをけるこりと笑ゆまきばおよひだらり[illegible]
まとひとびまりきけんろうぎくそいぬ
けるやうかけるすぬへのゆ[illegible]ばるどけるなんーあ
あるこうかるとあぎーまこーきのび[illegible]
よゆるまひけるへびかぎろくくをかーなあやうや
やまつーうかてひやるくけるよぷひくとは
るけきとをそぐゆくぐうはとるかやうるか
あ師よあしておぎーはぬきてなけをーとぷよそ
あへぬ行のけんまどひまでんなるれどらうたくい
とあーと思ひやるけるひろりぷぐ紀あるきどぬ

言あーくばまや行あうあけめう数氏あごりいいと
あるぬうちあぐきぬくくよるりけよかど安文も
ふくあーげゆをみくけるひをぷぷ氏のちもありくい
ゆくうぐーけへどけーくへくをけくるゆあ
らぷどいとあぐ氏ゆのをあんぷくれなるひまで
をなのすやけるーまんあるあーとのをは
きをあ数りやるあよ。西園寺（さいおんじ）大納言さのびてまのり
けひるとぷくをきらあくいるんぐろうはひ
ゆくけへまばは母代のくへるぐをいるばをんりて
あうくをのをうけへぐあるタけるあはより
までんけいぐよ又うけるけまりあんとをの

めのくるまにてそれもまちかねて
ゐたる二条大納言殿のおくがたの
みちよりの大納言をせうあまがあまをしていとうら
くしけれてゐたるひきれはなるあきび
とくくしうるべき事ありとおぼしてぞ
しかの大納言殿車をりとぐしてんよりぞんと
はげして門のもとよりをせくだるぶうし
蔵人乃ぶうしうるはてゐりたるひぬはよい大納言の
まいりたるとはげしてぎいきたのびうち事をき
じつのうちへくるまとりいれおろく
ぬりたるよりはるかにやしうと思ひ
ぬぐ〜ぞそれはのなどくしたるはどあるのなや
めをとりてすりてで書をとりてんのをきんを
まばあるとくいづきやらしたりて中門を
廊よりのぼりたるまでぞきのいあるをてれ事あるを
きなどの童あるをいでくるをはたるとき
ゐとばくばはげえすきあるをおくとおぼして
ちりよりたるをて入たるはどあるをうち
ひうひやうたるへゐるはたるをこのうへはがが
ぬどなるめくれとはきくくしう日はのぼりあり
はくりやうたるをおくたるひくぞいとあるをうしうる
あるぬ御おくりひくりるとたるをけるぞ大納言殿の

まとさてくまのやまぶしひろうにぱきいなすびぶれ
車ゝわれくるゝ手ゝ[illegible]たくそれたぱおろやうはう
むとあがりて法勝寺一人うれまろはさやとけ脇
ゐまくとあまとてとぐぶめくゆりぶのめろりぱと
こそんきいと思ひろわうあのあとぬはまびひるれど。
人ひろ手ゝ[illegible]ぱろまりつ谷大納言殿車
あどあがりあくせくいうめもあの文よ屏うあるあ
めゆとんえん殺ぶおいとすきくゝれとざりく
ゝあゝとあがせばあやくそであぶひよきぬゝ
を[illegible]殺ゝり殺勇てこのやうくかんくぐれぱゝ
くとあのし手屏あぱいとんうゝさがばうえくぱ日ぢう

もあゝあれまとうゝあり手あぱいかあこがまうう
あのあとぐ殿ひうちもいうふそやとかをくあが
ゝみぐまくぱかさあええゝくをとうまぶらあと
まぐ殿ゐまはくうこのとりあくんあゝうれうんとも
ちろゝめさひたぱ屏ゝあがすぢまて行ぢどふぢ
かゝめ法事ゝ行ふさへなやこ殺ぶとも大納言殿を
ぶとぐあゝとあぶさまてひばいとひ屏ますう思ひき
ちく殺ひうぢぱぞまりあくさぱきとをぱすぐ行り
ゝく車やありうんぞ殿ぢど殿事どめゝいと称
むとうようゝひやゝくゝ殺殺ひ事ぱゝとは賜の
殿ぢとさへぱるにぞぐゝ殺ゝ殿ぞぐんもありうる

そ、ぐく祈あくて弘安七年二月十四日小文ゝれ
させ給ひ御ことゝも大納言殿いとゝなげき給ひ
めるとゝ。新院まさ一と接近衛基平の大殿の姫君
女御まいり給ひ御ことゝ。ぬはとゝ。ゝ。はうとゝ行
院号あり新陽明門院とゝ。ゝ。ゝ。

うへ行ふ事よへく移御ども也めして毎夫とても
して乃せ〜ぬ御ますへの御あうぶ地下共奉ひとさ海
くの面白さ事ども例のゆきたうくて
まことをえかくとぞ同三月廿六日石清水社へ行幸ぞ
同十九日於義社へ行幸いづきもめでたうりきぐく
ぶぶめて記をさ給てむと毎づりぐくとめ給わぬ
春宮乃御元服八月と仰せ〜と奈良の興福寺の
火のゆめ〜わすれびとく十二月十九日まで世を渡給ひ
年の十六日ふもづ内裏へ行幸はるう清涼殿乃東の
廂に侍ふをたく給ふ給つを伝ふまはせ給ひさ
いまた左大臣 師忠 理髪春宮權太夫 具房 つとめ〜新

御禊 悲仁とり記。格別後ゝ女房二ゆくきてよう
りまてふてゝめく十二人まの家ぬのはくさ・も院乃御車
まて殿上人へ内面百余ぞ乃どいやびゝ〜てまいり給
面ゝ御門まえいづまをもいとうつくし記はあるとさま
るめり。新院ゝ御せどと宣旨乃おとゝまさ海
ぐゝとれこと同ゝれぐゝ御ぶれ行ゝまする世ゆさ
世いやゆゆしとぞおまろれまいゝすれどおさく形
ゝへあるをあく。新陽明門院もゝめいはおげえ
おゆやうるゝ〜かどぞのようれくあるは事
よて世ひとゝ移ゝゝゆ宣旨乃はは脇ゝ出
中れ者も御移りびやかすひたゝんとゝつゝさ

たりとのびてく神ぐらのふかのくに
てまつりたへまどぬとしをあくて姫宮一所だけを
ちらしてたへまもまにくやうあさ姫宮をや大
宮院のたてさいくあうかつきやすく結ぶかくて弘
安元年よりぬ十月だうりまち二条内裏より火お
ほくいかてうあさ海。方里小路殿のこうりの
火のくらくまてぬとしに八月よりたちまち
まて新院をも海渡たまへまど内裏なけぬまこの
院又内裏よりぬぬちつぎ火のまげさいとおそ
ちてそのころ大宮院いとへくなやませたひて。
中院も新院もたちのはちりたひて秋すぎもおは
しませばあとの御所はいかにすぐをたえ
ものとはてひはあるでさせたまへ中よ殿院の位さんは
内御所の内侍といひしーグ殿よりぐ物はたへまし姫
宮のちはは土条院とぞ生しまいまぐ宮はどあり
しやうはたちふうてけはてせちよかくれる
てまつりたる民新院おのぐらふはいよけてうぐひ
ぞしたへはどおのはやこれてちいぐあわうんいと
しう思ひのりはあさあとおがーあげくれ菓
相ちりいまてしうめぐくきはるまて姫宮ま
でいぐたさせたひまさかぐみなくく人見とたくひて
ちあきばおやしうそぐ御殿といまるもなくて。

院のはゝぎみとの按察の二位殿まゐりたまへり
まゐりたまへるはのゝゆゑをいとゞゆゑあるひゑん
はゝ母きみとは誰とうかゝへとゝ人のとひやまれだにのこゝぬ
事とのこゝろいとゝ殿はひとりはゝ母あくがれ給
まゐりたまへるすぐれたる人なりすぐやかにうつくしきまでた
しなれさ殿はゝ母ぶくれたるかたちにて
き給へるとしのころ十三ばかりとうるはしのでたちそめさせ
給へるはのでたちなりはつかしげなるこのきなりはつかしげなるとら
うがうつくしきまでそあるべきこゝ女房なんどの御さしし
まして男ばらといひしに御ぞやうとりやきこゆるれば
の御ぞなりてぞありけるはゝ殿はよるをものたまへやう

よ位の御ぞにあひくめられてく姫君はまれ給
あるりしとゞまりたまへる法乳母は按察の二位殿の里
うへ立ち寄院の法服のとゝ二位殿の里
ておとゝせ給へる近衛殿いらせ給ひめまでは殿ばらとお
とゝ殿しの政所のとゝをすゑ給へるとそぐ
ひあるく男ひやすくさ殿なまの殿ばかりくしを殿
君殿大夫ひいでたまへるとゝをいとゞうつくしうづきいとゝ
里給ひとく殿の少将殿の法服の大夫君中将だちふ
てものの給へるをもとくせどけをしのけつゝうも
さうすたてまつり給ひたれば新院きこえ給ひて
ひとくゝ御しき事ありぬまいりまぐれありもな

おとかしうなり給へるとぞいのそで引きぬぐへる
屋うハあるむとのゝ後ゝ後ゝ給てゝ此れとゝはは給ま
はゝ多をたりゝ也給ゝ屋ゝありゝ又小野川殿乃女院小
大納言殿ゝとてはゝ御ゝ記ゝ人乃曹司小下野とい
むしゝものゝ也回楽とゝやいゝ事ゝするあやゝ乃清姫
乃ゝとゝ玄駒とゝいゝゝ女ありきゝ此女院ゝ新院乃法
母代ゝそ給ひゝは事しゝるゝゝかゝなのゝゝ給ゝ
ゝそめけるゝやゝとゝ記めきゝでゝきゝの院ゝめゝゝ
されゝく祇山院乃大ゝとゝぶ此御ゝるゝなゝれ廊法部
とゝそ付ゝ奉給ゝそ此御ゝゝゝゝゝを交むゝまれ給部
ぬ大文女院ゝ贈後ゝて給ゝゝ御ゝ記ゝ西園ゝ此ゝ歌

乃ゝの京房とゝひゝゝゝゝ女ありゝいゝゝゝゝゝみて
あれゝめゝゝとゝて西園ゝるゝゝゝ此ゝゝゝゝゝゝ
乃ゝの加階給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
為経乃むゝゝゝゝ此御典侍の中納言
御ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
蓮院法親王ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
典侍十楽院道法親王ゝ御典侍の服ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
八十餘人までゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝは中ゝく女御更衣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ざうしき雲れうへるり。西園寺女御まいり給へ
しとんやうあるべし。りうれ為りうすかくともあが
したくぬい四ようあるろおもしるすありとそ世人も
ぶぐめ記事ぶ新院の位れ御まいり給へり西園
ちの中文ゑ院号あるて今出川院とさて西なり。
うれ位おがえなどのいとくたりかりしりぶ乃
院の御ゑさ面を位くくたりひ出のし給つかめりな
どういもちとへ位りきぶとそ為りひりとゑ
ゑ特明院殿の花ざうりよ新院ゑうり給へ鞠会
ゑうり位くむせんとあるを言れそ位歌乃花ゑ桜
ゑを位うりるりるふぶそれ出ゑくとさくめしてうら

しゑくきそりりくあるくはりりそ位花の方乃
宮あくうけがくゑみも上達部殿上人いれ位りくま
いりあつまり位法勝寺御願の下臈ふどのこうきう
めさてさくひありりわぶ神ぐらぶもと
いぶされくぶくふ引位くろも位寝殿乃母屋り
位まり對屋ふまりゑ出れゑと新院いせ位ひ
く新院乃位御さぶめをうきーうくりまいりよ
やうして長押の下へのさ位げさ撤位ぶどぬ本
院いで位ひく朱雀院乃行幸よいあるべれぶとと
うりとさを位りゑ出よ。ゑまの御幸ゑ位御殿を
おろさ面くいくあくやうあ位りるぶ出ゑ位

どいて物もゝ語しめぐくしたる物語はを
てしまして花は無ようつゝわぬぞうるけるぞよれ
ほどのゝら雲霧の中にて御ぐりあれ
乃人あらいてたまへ御院まゝ氣所の中宮を
ぐるかゝらかゝらうへ宮院のゝり給ひて出ゝう
げるどなほさうゝほどゝ。女房那當ゝ又よゝり
さつ久我の大ぐゝのひまごゝろやかゝざゝれ
七ぐまゝのみのゝちきあぬ歌吹乃うゝたぞ。ゝのゝ氣ゝ
かゝ衣ゝゝゝのゝてゝゝゝ乃ゝゝへ
柳筆はすへくゝゝゝゝゝゝ
いゝすきばゝれ雲ゝゝゝゝゝゝ

きゝゝゝほどゝ風すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝくゝゝゝゝゝゝ御鞠數ゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
むゝまへゝ院乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝ御揚美なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝあけたまへゝきば。花はゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝんのやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ一枝をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
夕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝたまゝてきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆゝ敷殿上人侍数乃為ち殿者も燒ぬ　をつくれ
てうせてゝ乃ちはるまゝ　しくたまゝ　月乃もしめ
るゝ　ゝ院乃又記ゝ山　此法車ゝ姫　もたくまつ
分　車おまゝこれ　ゝ　ゝ世乃又ぶぬ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　

ぶれき人くさまこれさよりひ給よ大納と云二位三
位相参議四位五位などはまりて数さてしばしばてお
乃月れ人の道をもまもるまもるまもる

はうこうへ幾程をへぬとてきのやうこゝ
おひそゝ雲院をつくりねく
又乃りはぬゝ又のはゝりのぐさせ給ひて梅丹波ら
はゞ。白梅を御覧あり。永ゝりめ。へて彩院も援なぞ
せ給ふ。二三日おもゝ御所乃もゝ月とも我
おもゝゝとゝ。ゝ。ゝ。

小の陣推参まではくさられ給ふとぞうけたまはる
し。はた代りをも又勅撰乃さたをとゝ〻びわた
給わり。為氏大納言ゝ〻いまに所あの遠治四年
まで奏せられ給ふ。續拾遺集ときこえたまひ
あるさまはいとく給しばめれど。艶ならはみ給ると
所乃へくゝ中給わり給ふ。續古今乃引うつ給ひ
給のゆいをもらるゝびかるくゝ給ふべきごあくて年月
うりぬるはてゝ新陽明門院又たゞあるべき御ゝ
まはとゝ給ふし。五月たゞ給はるゝ給ひ
給ふ御をおいく敷まして世給ふの天下乃
人くはいりはまゝ所あのゝ給ひむまれる給へ給

ゝ給ふ文をあくれさ給ふ。新院御事ゝ
御ゝされ給ふ。又ゝくゝもゝ給ふ給ふ給へ
ゝ給ふ手のれ給ふもあるゝ給ふ給へ給ふ
ばくよいとゝひくゝ給ふ給ふ給へ給ふ
給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
く方置中納敷よ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
後嵯峨院乃更衣腹乃姫宮。聖護院の法親王乃
と門の法服とゝ給ふ。毎代ゝ給ふ給ふ給ふ
又三條乃内大臣公親の法師乃乳母あり
ゝ給ふ。上の御乳母あり
ゝ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
ゝ給ふ。女院ゝ院のゝ給ふ給ふ給ふ給ふ

の初さに成てまうれば。爰の法車に乗りつゞけて
よれかしくめぐりたきは事なれどうれしうんやく
終りつるとりやかしこにかしこまりすぐれみだり
くるまれかゝるれば。物かん車どもよりも百倍な
やうく切りすぐしきるさぞ。ゆーもやうあるなめでる
きはるものあり十ぐの人ぐもあり者とりも。
あの爰も親王の部屋ありていとめぐらくやうえ
しほどゆあくれ年九月ゑくれさ後白ひかし。
ゆくらかりかるしは事あり。弘安も四年とり
成ぬ。爰は後宇多院姫宮姫院姫宮
姫川院の御女にて祇園仙門院とやうし女院の位

服ぬきぬ。故院をいとうとうれ次かづきて
まつ世ぬるとりゆくうちをきぐひなくうつく
うれくしまりて。人のよりも女乃幸を歎んとりは
この爰乃御位をなりんさるどう爰の位もあるを
きけるゆあれと隆行のあるあるゆ。
よゆあれと子隆やとこの爰くまのあるゆへり。
あさゆきは事さへのぐなてきれを位うとるぐ
しゆうにうゆさ世位ひるくうとうやえし。
世のうち蒙古れくうるやいをくゆ世れるはて
ぎさちぬ。多くはりくまはそうう世ゆ走
ぬ。女院彩度さあづまの人は下あるぐ。酉まる爰は

京にまゐりて、せがひて、東大寺ぞとのりさつて、
畑づくりなどはさあり、くまくまのり教
さつて、伊勢の物供りて、御住大納言まの所、新院去
八幡へ御幸なりて、西大寺へ御願、真讀乃
大般若供養せられ、太神宮へ御願、我朝代々
なりなられ、おさて、西とおぼ日乃そとあるべ
くはば、御幸とめすべきよし、御所をつかはされ
るとぞ、大炎院いとのさまきき事ありとぞ、
ゆすさ殿ばらでおとらりふあれかつぶあるも伊
ひさつぬ祈りどをこらるくのしらあ院の御代よ
り御幸の試楽のころかかはれるかあるとぞ、

くてそさづまるとめしとぞきびきのくめぐくしう
牒狀とやこらてまのきかくあるどありてぞ、
しゆのあれなどよりかはるむ海どよりかきりの。
ぬきどをを七月一日おびくしきちう殺吹て異國
の舟六万艘兵のりて艘船へよりきるこれ吹破
きぬれたおるるあるきづこのりうのこれる
もなくく本國へかりふりあれ面ろり
高大般若供書法いとぐりあるる刻限よ時るる
ぬまま雲一村ありにかんてあるりれ雲の中よ
りきろさ那ますてもだにろうぶやの大きなる面と
さして那おくなるをとおびさしかりきば。

かつこゝかを大風のゆくゝ海と兵の乃くてゝ月やすくゝ
浪あゝるをたち海のうへあさ海ゝくゝありてこれしづ
こゝよけゝこそだな武者部屋は祢乃おりゝます事
あゝゝゝかゝりあれよこゝぞさて為氏乃大納言伊勢
の勅使ゝてのゝり道ゝゝゝゝゝ
勅をゝて以の祢をゝ乃祢見ゝ
よせく海原そこうりくてけつゝ
あくてしづまりぬをきて京ゆを東にゝもゝゝゝゝ
ゝゝ井ゝめでゝさゝゝゝゝ乃ゝゝ
ゝとゝゝして湯ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

内裏よりおりたまひて乃至三位に
昇進ありて中納言にまでなり給ふ
を祝まいらせ給ふ祇園社に
まうでゝ澄月の如くにとゝやあやまちなき
歌道をゝぼえ給ふ
きてゝをあり給ふ義堂小路殿へ
まさぬの中つかさ殿ひ給ふ
などまくれば殿へ世乃人もめてゝ
き事に思ひ給ふ
さまひ給ふぐいとつまくるゝ新陽明門院乃
中つかさ殿の大納言の中安殿ひとてまひ

給ふ
月ごろ病気いで給へ
中宮なるべしぬ
へば中宮の大文院御
天下かゝ病ひ
安元乃中宮より
殿かめり
院東二条院乃中母なる
のゝまゝ天の下
いとやむ
少弐方
給ふ
月
中宮なるべしぬ
へば中宮の大文院御
天下かゝ病ひ
安元乃中宮より
殿かめり
院東二条院乃中母なる
のゝまゝ天の下
いとやむ
少弐方

治承元年正月廿日安八年二
十九歳にて
中宮の大夫院御
世の大事ま
彦海波親
隆房大納言
隆衡の
大文
院乃中祖母
大臣
中宮
沛

さびたる法院の住宿世ひとまがさるをあらしまゐす。
とくいまくとりいまくで后園毋おりくとゝぶ給
ゑぬきとゞくばかりあるもあつえいとゞ記まあ
いまゞきあまびゆゝ給ひ給乃はゞめとりそゝ男
まいり給ひておゝうひきゝろくんまくゞ二千の
屋巻記とりふおろえん給ふ法院ゝらゞぶ記して
一給へまゝいづきをかのゝゝふ男ひのとく二代
の國毋ゝていさるすでふ法ひまゞのてみとえ
乃給ばくいさくかをは内よあとゞおりむを
ゞおく一ゆゝるくめでくれりまたはゝ
きゝかをそくゑるるゞけまれるや

あゝんゝいゝ乃基俊のおとくゝ此法女姫法の法代者
大后交おとふりあゝうゝ給記ゝ御よとゝ花
ゆゝ給ひて法教のゝちいさんあけきゝ法せぎ
ゆゝき九條乃おとくゝ師補の法ひとめ天暦記給ゝて
おゝくゝ冷泉園融あ代乃法毋ありゝうゞめぐ
ゝ記法代をゝをんてまつゝ給法門ゝをゝた
ゝら給記くゝうゝ給記ゝ法雲乃法ひとあ上東門院
後一條後朱雀乃法毋ゝて法孫後冷泉後三条ゝて
乃んたくまつり給記ゝかどゝもゝれゝゝゞ給ひ
ゝうゞ法ゝ後のゝ法なゞきゝ法毋世ゝく法いのち
あまりゝゞくて中くゝ人員とゝゞ乃男むゆくお

もて海へきぬまでもこれ一乃人まて世の親とあり
給へりもしうかゝるくとうくくく

法華經入れ給ふ。名香柳乃織物よ羽とめのこ敷よ
くわ〳〵ほんくゝ法經の法くゝ法蘭乃うち
よ西ゝ一間よ繧繝二帖かゝ猥乃まとゝ○まきて門の
うへ乃清涼殿とゝ法ゝ乃ゝ法殿の内よ大文乃かゝらい
一帖敷くゝ春宮わゝ〳〵せ給ふ。西の廂よ母ゝ屋風
をそゝて繧繝二帖ゝ敷きのまとゝ○よ淑后ゝ給へ。お
ゝ殿よ東二條院ゝ〳〵猥給ふ。ゝくゝと顕傾乃
几帳のゝくゝびゝをゝゝして多くゝの袖口とゝ出ゝ
くゝ宇ゝ乃わゝれくゝをゝいぐゝまるゝ。ゝ乃風姿を
ゝ乃ゝ法にゝきのいゝいゝくゝ法ゝでゝはとゝみゝゝうゝのまゝ
ゝ乃わゝゝとゝゝゝわゝゝゝゝゝゝ殿乃門ゝ宇文大ゝ院乃

二条院今出川院ゝ宇文大ゝ
のゝゝゝを耳おとゝくゝゝ
乃ゝ猥ゝゝて後ゝ上達ゝ部ゝ法ゝ
右大臣花山院大納云長雅源大納言通頼大炊御門大
納云信嗣右大将通基春宮大夫実兼右大将云守三条中納
言実重花山院中納言家教右衛門督云俊房
大陽ゝゝ西ゝよ西辻大納云陸奥春宮権大夫具守指中納云
宗冬宮宮条宰相隆保右衛門督為世宮宮祖父せゝ給ふ乃
上法ゝ引垂衣生給ゝ法ゝ乃ゝ法ゝ法ゝ法ゝ垂衣ゝ
よゝ乃ゝ法ゝ法ゝ殿ゝ法ゝ殿ゝ法ゝ垂衣ゝ
ゝゝ法ゝ垂衣ゝ法ゝ殿ゝ法ゝ殿ゝ法ゝ垂衣ゝ

いむとてびるまめくうんとなりぬ。ぞ。はこれ雅楽の
の中よりおもしろ海とぞ。文女院もろさあやのこ市ぞ。
二条院ゝ織物の柳さくれ八くまたなみうちのは
とあくせの御記ゝかじ橘乃ぬこうちにあてまり
まりぬ。文紀乃あり日十紅梅の御こうちさぎ
のぬひくへあゝの御ゝあるすしに御たて
まつまてゝひとりをとようゝてう花んを給
ふおくしますむと物ものかをものとりり酒
のうへはのよ御まりまるぬれゝ歩ぬゝろぬ
知て御自らぬ給ふ楽人新人鳥向楽と奏と。
音いろゝとさたゝそく乱声左右拝とのゆ。其後
一越調の調子をゆゝく。楽人新人前張集舞の御よ
むひゝく。安楽塩とぬく。前張たゆよりられてま
いる。階の下りまいりく。講師法華
寛爽讃師僧正守助尊師高座のぬりめまて。
堂童子花籠とりの御とり使公教朝臣
とりぬきて。舞と奏すゝ。ぬりにぬりぬ
そゝにあるまきの雨まる柳に御ぬ
ぬり。一乃舞久助といりのすゝ御ひていとす
くゝりぬりゝあゝ御ぬゝりてありゝ。
萬歳楽賀殿陵王右地久延喜小納曽利久志二の地
よて勅録のをとりいるすはよまつれ時君れ

雅とそなたて賞作所なかまばうきをあつりて雅
しあてまつれほどいとあるもの久助まさかなど
いつものどもに賞うけるあつりて絵をもちるどら
れなふ物をとるあもはきくしゆへあて
見西講讃乃ちとじめでたいとうどいまの世まは
富樓那尊者のごくいとあのなまどいまど
めてくくきくなまつりなみどれどめどたれる
をいひつどもるあたてのら楽人酒胡子を奏
もうれほどは僧の禄となまは頭中将乙鼓より
もじめて四位くれもとうどまて稼ととあるいる
陶睦に平胡籙りををの袍は草履の剱ありと

くなり。後定継卿とは巡方代弟とはしあり。衆
僧まるもはるやくふ廻忽長慶子まして楽人兼
人を召さめりのち犬文院准后の法参まつる。陰暦
特市物を侵遂実財実冬と実躬信輔後光ちどうう
まつるかくて又の月はあるひの一日なりぬ寝殿乃よ
うもはるのまく彩り華まばりとりのまて毎
屋の四方は御代とうくあ院内代上乃法藥の後宮白
はうつひはあ芸文のそ傳をくあいりはへいたま
実兼はとめはあ酒代うへ今は例の法垂衣くれる弁
のうちうち錦あつさはぐをり掛乃は指貫いとめて
ささはあ引るをあ院なあ院うすの法芸

はきしめ給ひすてゝうすもの
鶴乃浮織物の法衣おなじ法橋英俊の冷すゝ
多うられ給ひとゝまてまつきてゝ
そのうりゝうとくよ地くゝきはゝ面かゝちお
おはしけいゝ我はうりゆみしたやゝ
御おそ浮線綾乃はきしめ
をゝまてまつ
おもゝゝゝ
くゝとうちゝまてまつ
ゝまつ！大文院ゝとなりゆ
ゝはうゝれ給ひ

うゝはゝゝひはゝゝ
ゝまて法階乃ゝゝ
花氏はゝ
ねとのべゆゝ
只西氏
花山院大納云
陰膳大炊御門大納云信
はゝゝ
能ゝ
まいまゝゝ
文御琵琶牧馬　文指寛親定

たゝ〻ぶのよをもうけ。上達部の第乃殿別てりあり。
第兵部卿良教 花山院大納言長雅 笙源大納言通頼 左
衛門督。篳篥 藤原行房 琵琶 春宮大夫琴 左大将洞
院三位中将実泰 和琴 大炊御門拍子徳大寺中納言実孝
求拍子実冬。かんの〻くゐ衣をいたし。
きこえ安名尊 席田 鳥破 急律 青海波 三臺 急
ぶ遊をしてめまぐるしく教上乃五位ともまいりて管絃の
興をとりつゝ。御ぐしかたくかゝりたまひてみちく
の殿ばらも加階したまふ。れうのうち和琴の拍子をば
まち為道朝臣とぞ。袍は壷おひてうち懐紙
をとりぐして。上達部の座乃うへをとゝりて階乃
間よりのぼりて文臺乃よりてをく。其外の座上へ〻ぐの
手ハひとつよりあつめて信濃一度より文臺ををく。
文臺のまへ南面をきてをく。其文物語のたとりさ
ら紙をの内裏などいふ事をかくるまりけると。
あるひ花をめ〻しもあるもし。酒くゝこゝろ上まで。こゝろ
くのこゝろをいふ。右大将通基 奥義の山吹乃下ろも
きをりて別よ手をもちて。内ぐうへの座手よ
敷ぐうに紙をひ事か
紙を書紙をなり紙世と翠ろ
なりまひてりうりかうのまりか
新院位製ハ内大臣うきさ作よ

百姓とのまや鳴くひぐるまの
はつかりのまうちもの
まうえのさたはよまはせて
うたはれきらひのまつ九十
ものとも世と後さまわもうの
制数の趣ごとと上文字の数しれまるを賜寵れあり
とりや涙くきのおかうれどむつくそう
しつ春宮大夫こうはけりてそうく作品
代しのあしたおとうのりる前の段
しりあん年ハうのまあつも
その後第四のかりのかうもあるうへかて歌詠
ゆうくの女房多くれうぬぎのつはりくへて紙
作しし紙ひとりひくまをしそりむ
うのかりむ山ざあとうひうし幻梅さて歌
蕨ごう女院の作あれ内の作うう内侍典侍ち
しもこれ打ぐうねうは作ぐ山吹院の作う
えひうめよう作ぐうぐ作うあうすぐまうの
女房うへひうれかし柳ごうはくよめあや
なうきうとはくうれうぐ文も多ますど
らとうう作くまうりていんぐうそ作りけ分後
嵯峨院蓮花王院作華あり内蔵貫首たかり
やうか菊のりぐうの山ふ作のうう面おりう

だいとゝ稱ゝるゝ小世の人をいとゝ
ゝくゝ女房どゝを八十餘人をゝあんくゝ
ゝくゝいづきとゝゝくめうつゝゝていうう
ゝゝをけゝゝをめやゝくゝてゝ彩色上鞠三足ばかりたく
院健仁の中ゝとて彩色上鞠三足ばかりたく
せゝまひくゝたゝくゝきぬ内ゝ人沛鼓らむゝの
ゝゝ風だゝじめゝは草鞠とたゝまつりゝれど撲
ゝゝ皆かゝあゝつゝりゝ色ゝゝゝ色
竹むゝゝ色ゝゝきゝりのゝんゝゝ色ゝの黒人
をゝりゝ玄ゝゝ色ゝゝむゝゝ色ゝゝの
ゝゝゝゝゝ彩色ゝゝゝ色

なむゝゝ色ゝの色ゝゝゝ関白殿ゝゝゝゝ
内ゝゝゝ紫草ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おりくだかばさられど。ぞ氏はうきみ一はぶ敷などの
事どもあまた。ぞ行幸いあるひゆゑせきまし。ぞそく
アしのみはやまのつあくるを日年北門じうり鼓数よ
里面国るまして。遊道しはくぞ。あ院はたぶ。ぞ一数
春宮はくてりあ弟て雲くおりませはよ。たを唐のうこ
新院の庄もう張もうまつり。桂光親定まうこの庄し
うせもうれうち。ぬ音堂よはまいりあるふぞそ我
はくて一まはうちうびそめくうこの庄華とまうち
ぞはあう。御の庄まへよかりそめはまーるぐ皆
わくて世結よ。庭よ上年つきそ市越のぐめす。
節花山院大弱云筆左尾門参。ぞうたは義行春宮

はそて左まよ。筆大鼓具顕鞨鼓範藤盤法師よ左
らへとよくく。探来老花種谷白拍千秋楽ぞどいうぐ
うはりはは。ぞうはりはぞ。ぞうはきまりを中く数地
義行花上菊明也とうちのぐーそはよぞくぐ地乃
者こそてもやされくえもいはびきこ極具顕花菊
なぐ羅綺重衣と二返だうりのうふぞけ形き
ぞと後横婦よ神くこと本院くへ治へぐ新院は
あ忘はとけ治よ程そぐ法はひさまでえんなも。
くて世結知てを又きの花乃りげよて鞠はむ
せられはく。うまてよりあぐでは毎よはてまうりく
をーいぞきれたぞはうとあうはあづくふさぐたこれ

けしやうしていとはなやかなり
上達部のりてはいとはなやかなれとわかうなの名者
の調ととうつされてかくのつかはしかくはかう
まつ春宮又はおとゝしやうしやうとこの男つ者と
いと女房はあまたまいれりはよりはせてゝ舞の車乃
きこえしいとえんなり。蘇合乃五帖 鳥蛮唐 海波
林樂 越殿樂 などいとおもしろし。兼
行山又山とうちとんじ。さまはよりはせ繽紛さうし
とあ院あそはしまるふ水のうへをあやしきま
でかのけだちあべくきこえ極楽浄土とあ
でたんれたる四苦年始わりこれ松の枝さしかくせ
給乃たゝずまひ井いとこゝかしこあ院よりはしめまうこん
のどうふんてぞをきこゝあはかるとこもんぶれとみきゝ
きぞすめとるくはしとはきはうひとのそめ所ちする
りぬぐれ乃山のたまつ光のぞ。ぞ影うふすこてんこと
さ影く往生の御をこうくやとそ初ゆゆぞこゝ里乃外の
ゆちこうこれるどけこまりて彩院
雲乃あんこりけ居をとまけてこゝ
離りのあゝむ女房のかしよりわ
極くとゝとはまこ代とこく
春宮大夫
むりにもるとたちあ所は御

具顕の中将
くまもしぬかけを祈のまゐく
まつる
九十よあまりをかさねる齢
本院
さまたけくれはて世のあるかの
くれもの名ぞよ鶴の毅へはるあしよりてはりまを
ひのぎまつるもひうてせこまのへで沖をくまの勢り
和琴一さてまつる按察ぎことや准后のもけい
くい和尚の三衣袈裟地乃ふ一きよりけうんくだろう
北野よりへくまの御伊ぜまきを大院のはさうかも。

掃部寮火をげうとりてうむまつるさは
をのまめーうこやびうなりぽくかーこまをはは変
乃事どもをりをつけまるをんへのこそおかるあれべるさ
くぶおいうかくあるくらむとあさまーあるとか
くをびりかどお弘安も十年よりぬこれは門
位よはをを治ひて十三年むらりよあるぬん本院
まちどをおはがさ御んたという須ーををた
りうをてまつるるや。例乃ぶより変をるるあ
ゆへ一。新院老御うくさ御よはいびそうきこ絶
ーあやひるー。去年乃去は乳母の按察乃二位殿
ーせめーかど。めくりの佛事よ亀山どのへ参り

まして いろめいこう八講おこなふ世ぞ人目多いとう
ゆゑなれども九條二位隆博卿の書とおりて
はとめてとしふるほどの代のはりとや
雲井中あをもおひいつむ
女房乃中よりきこえふ院をひでそうあるよ
のさまよ
ゆきのうらよりもをのとりつれ
よ海げあつびおがさまおくほどあまどころとしとの
十月よりはりみさ殺たまへのうへ世一ゆぞあ
殺たまひまつ院ぞよりをいとうありくのとあさ

あるよ海よおがてとくふ法華もありこうめで
きまうはくまはせば御まつりあるあどもあうく
ゆづりやまくまあどはばされはるふいあるく
うりの元めあう世とまげあるく新院おはがさるべ。去
宮位より郡おひめきで天下本院よをうつりぬ世の
中をまはれて人さんいどをかはきえるぞあるし
きけおいよりの御門よりも故山陽のはるはしまで
ますまはせ殺へどの代殺げのとそいつるとも
きさめぬ人ますれたるあれ

内閣文庫
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan